

# うたそう

第  
16  
号

2023  
September  
9

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「月」	16
短歌でまちがいさがし	21
一首評 「そらよみ」	22
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	24
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27



ご参加  
いただいた  
みなさん  
(五十音順)

遠藤 // サキ	@qeq_no1	たえなかや // @suzusuzu2009	Marianne	@AmadeusViolon
大坪 命樹	@OotsuboMeiju	多香子	御糸丸 //	@MEATsachi
大橋 春人	@hachidx2	田中 翠香	@suikakinobi	@cotoha_mikage
ねねむかんた	@subjperf	千原 // こはる	@kohagi_tw	未知
緒方 燕柳	@OGATA_Enyu	月岡 浅葱	@pale_bg_moon	水也
歌島 直	@Sinn1990	天国ななお	@momomiyam	@57577_77575
がね	@amicus08	とおえ夕夏	@croissant_hey_z	@qunnyco
涸れ井戸	@kareido1111	中村成志	@nakam8	@mushitake
河岸景都	@kate_kawagishi	夏生 薫	@kaorunatsu	@Tohakumutun5057
あおこやうか	@aoisoka7	奈瑠太	@nelda_aa	村田一広
麻倉 ゆえ	@AsakuraYue	北谷 雪	@kitaya_misonomiso	@muccic2022
雨虎 俊實	@amefurashi107	砧	@kmmr_r09	森内詩紋
アライアヤ	@araiaya31	君村類	@utsuronahikari	@NJq4oEv9g9lcRpu
有村 桔梗	@chattenoire_k	虚光	西澤子	@aieOhimeco
井倉りつ	@uta_litz	九月 ゆうれい	@suya_suyariz	杜崎アオ
池田竜男	@tankadragonman	くわだたけし	@tkuro2016	@moritsaki_ao
十六夜／朔	@zayoi_2022	桜 ゆくら	@wjs9f8NwfujWq3	@4kitanka55
石川順一	@Hitler57	佐藤水魚	@satochio_tanka	@moronooto
魚野 やわみ	@__uono	サハダヌーラー	@kyokousalad	@28moonflower
宇祖田 都子	@Shinnsyutu2020	汐射 ハルカ	@shioiri_haruka	@rou_tanka
泳一	@Eishimada	雀來豆	@jacksbeans2	茂田直人
hs	@hs welt	白虹 夜花	@yohana_no_sekai	月ノ華
		#めりた	@mskpompompomfuwa23	

73名  
計  
飛行機

たへやくのじ  
あらかじへやくのじ

## パークアソート・バケーハ

雨虎俊實

ナイトプールのフロートに横たわるビキニブリッジ渡る(てくてく指が)  
きみの背はストラトキャスター軽率に搔き鳴らさずに盗み見ている  
僕たちはハーバリウムの中にいて飛び込み禁止のホイップスル遠く  
糖質の真夏の粒子を吸い込んだきみのタオルを渡してくれた  
今まさにきみが「あーん」とくれるのがポツキー史上もつともHモヒ  
塩分と亜鉛やフツ素、オランジーナできみの吐息は構成されて  
キスマーケここにつけてとねだられて痛いと声に出してと思う  
こんな夜はズボンにチョコをつけたまま月の明かりで踊りませんか

## スイーツアソート

有村 桔梗

前向きな性格だらう みんなおなじはうを向きたる鳩サブレーは  
ボロシヨコハ、ひんぎれ食べる さみしだがもへひときれを食べやせいか  
さみしさをわたしのなかにひからせて水蜜桃のパフェをぐづしぬ  
富山から帰りて鹿の子餅食めば半分くらいまだ夢にある  
薄闇にベーカステラのふんはりとあまき匂ひに手を引かれたり  
フルーチェをひとりでせんべ食べるふふ野望叶へて夜がふかくなる  
わたくしに吸ひこまれゆく、ちじくのタルトはすこしゅふぐれの味  
いそじやんけーき屋ぐゆく わたくしを和菓のモンブランが呼んでゐるのだ

# 連作欄 8首の連作

#うたそら



「俺は楽しかったよ」なんて過去形にされて轟音響く空港

屋上のすべての赤い光たち「ぶつからないで」「ぶつからないで」遠くなる飛行機 きっとはじめからわたしのチケットなんてなかつた捨てられたことを認めたくなくて人間でいることからやめたい

眠りたくない日曜の25時 金魚が口を開けて待つて

おいでって言われて中に入りたい。ひれをひらひらさせて誘つて。

液体の中に沈めば液体が目からこぼれることつてないのね

傷口が空気に触れないようつて撫でてくれるやさしい金魚

### 食べたもの歩いたこと

石川順一

氷入りアイスコーヒー飲んで居るみそまんじゅうを二個食べし後中指の爪が人差指を刺すぐるぐるぐる街中歩き  
蚊を食べるトンボやツバメが好きだから田圃のあぜ道気を付けて歩くケリと言う鳥をシギだと勘違い鳴き出すまでは気付かなかつたよ田のケリを二度まで見ました二度目では六羽も居たが人が来ると逃げ走つたり歩くと疲れる汗が出る疲労困憊パイのパイパイ  
稻荷寿司パン入りカボチャステープ飲みブドウのジェリーをデザートで食べヌーピーTシャツ犬はサーフィンす詳細な記録に憔悴して居る

### ビフォア・フォーゲッティング

泳二

三百万立方メートル雨が降りどうしても届かない胸鰐  
汗なんて拭かずにサンダルで歩くあなたの街のある方角へ  
台風に洗われた昼を見下ろしてベランダで飲みほす缶ビール  
シロップをかけすぎた氷のようなゾンビのようなきみのTシャツ  
恋人よファールボールは夏イチの入道雲に吸い込まれたり  
夏だけは裏切らないな夕立もトマトも蟬も秋になるのも  
イヤフロンをあふれた音は足元に淀みを作る 暑かつた夜  
ひとつづつ書き止めた今からきみがすべての夏を忘れる前に

### 悪の曰も見ずを流す

大坪命樹

### 桃のしづく

緒方 燕柳

汚染水世界が海に垂れ流すは人口過多が対策なるやは  
放射能海にうすめ人にうす目 しかしして危険ぞ見ざらんとするか  
薄めても遺伝子を切る破壊力かはらざるまま広ごりゆきぬ  
負の遺産残さざらんとのたまふに放射能なむ世界に散する  
世界向け毒水流すはミサイル無きわが国が新核兵器なるか  
中国の魚の禁輸に異となふる政治にぞなほ倫理あらざる  
岸田氏のバイオハザード流しをる 人類愛が心中なるやは  
処理水の海へ放てる安全性 悪ぞ科学にて正当化しぬる

### 夏の落としもの

大橋春人

### 社畜さんになるワタシ

歌島孟

コロナ歌に終わりは見えず四年目のマスクも口をぐわぐわにする  
落としものだらけの夏を 二十年前は嵐に立ちシヨンをした  
忘れものだらけの夏を 十年前あえてカセツテープのサザン  
青春を遠く離れてサンダルの私は夏の終わりの屋台  
終バスに揺られることのない日々を缶コーヒーも高すぎるんや  
今、ここに浮き沈みする感情をうまく掬えるポイをください  
もう若さだけでは勝てぬ年となり頭のネジに油を挿しぬ  
限りなく静かな午後の八月の果てをふんわり浮くうろこ雲

終わるまでじつとしている湯冷めしたからだに残る火を抱き留めて

二日目のステップは味が煮詰まつてじやがいもの曖昧な輪郭

月曜日 オフィスのひかりは騒がしい 首の力が抜けないでいる

銃口はあなたにも似て撃ち出した言葉の影で冷えてく虚ろ

望遠鏡があれば遠くの星を見る 遠くからなら綺麗に見える

ピクミンが死んだら時間を巻き戻すくらいワガママ言えば良かつた

胸板に乳首があつて救急車のわたし以外を救うサイレン

しりとりをしようよ よるは はかなくて てんじようのした ただれるじかん

## 名古屋・金山

涸れ井戸

お弁当

かわはう

いつもとは反対向きの便に乗る米原を経て名古屋に向かう

JR線で金山ばたばたと行き交う群れと同化する昼

アスナルで時間調整コロシアム様の商業施設の愉悦

会場はレンタルルーム大名古屋句会に参加まる四年ぶり

窓からの日差しが一時暗くなりロック鳥みたいなやつがいる

全五枚清記用紙に過去未来森羅万象詠み込まれた句

歳時記のこだわりは皆それぞれでそんなん話すだけで楽しい

来週はフランスに発つ青年とまた会おうねと約束をする

## 夢のなかの中華飯店

北谷雪

個性

くろだたけし

喧騒と幻想 夜店は笑わない人とだれかに似た人ばかり

兎角えび餃子を食べたいメニューには 虹虹暇暇夢だとわかる

宝石商のよう蒸籠は開かれて澄面皮から翡翠の光

福の字は逆さま今宵こうふくの完成形を忘れてしまう

箸立てから選んだ箸に易占の男がわずかに顔を顰めた

戻れないことはおそろし湯はひどく正しい手順で茶器を渡つた

パクチーを口から生やし熱心に森の嘆きを語る隣席

瞬く間笑顔と真顔を張り替えるひとの真顔に手を振つたのだ

## 悔悟

君村類

横浜2DAYS

桜さくら

どうぞのアイスを食べる 恋も愛も勲章だったティーンエイジャー  
水差しへ夏がうつってわたしまで常温よりもだいぶ生ぬるい

世界中が暑いと思う夜の端の眠る間際の果てない暗さ

夢だって気づいてしまう流星群みたいに話がずっと続いて

泣きながら目覚めた朝がある人もそうでない人も足元に影

片方の翼が取れた比喩としてわたしがずっとそだつたこと  
この夏は氷菓ばかりを買っている壊れるものははじめからきれい  
ほんとうにひとりぼっちになつた部屋に窓は真東 夜がまた来る

お気に入りばかり集めた罪として命が下手になる罰がある

少しだけ素敵な家に棲めるよう芸術的な呼吸を見せて

悲しみの一部を切った新聞で包むバスボム、誕生日だよ

どこまでが私で何が私なの答えはどうに茶毘に付された

純粹なものはどこにも無くなつたヒトにもきっとネコの眼がある

糊付けを忘れた切手、意味ならばここにあるのに届けられない

君だけに見えた景色を切り取れば幸福だけは分かるだろうか

旅立ちの始まる場所に飾りたいコラージュだけを増やしていく

わたし用の梅干しといもうと用のカリカリ梅と母からの愛  
実家の卵焼きはしょっぱい味でいつもいちばん最後に食べた

昨日の夕飯がおでんだったから今日のお屋はおでん弁当

运动会タッパーに敷き詰められたベンチとおにぎりをプラフォーケで

いつからか変なふりかけが入つて数少ない母のユーモアだった

母の作るおにぎりはいつも混ぜご飯で春の花畑のようだつた

ランチバッゲに季節の果物を入れる母さくらんぼで夏の訪れ知る

シウマイ弁当も叙々苑弁当も勝てぬ母の手づくり弁当

開けたなら捨てなきゃいけなくなるでしようずっと前からそこにあるのに  
ひとりごとみたいに君が話しだす誰かが救つてくださる話  
手を伸ばすぐらいはしても駆けてまで追いつこうとはしなかつたつけ  
日が暮れるように終わりが来ることを悪くないとまだ思えない  
ゆく先が違うのだからそれ違うことはいちいち気にしないけど  
声がよく聞こえませんという声が僕のほうにはちゃんと聞こえる  
まつすぐでたいらな道に区切られた晴れた日にしか似合わない町  
駐車場に並ぶ車のそれに個性はあるようないような

## 悔悟

君村類

横浜2DAYS

桜さくら

- 7 -

- 6 -

缶ビール オレンジジュース あのときの子どもと少し未来の大人と  
子どもらが駆け寄つてきて次々と花火のように会話がひらく  
教わったわけじゃないけど輪になつて手からこぼれる星を見せ合う  
さくさくとりんご飴からほの甘い香りはじけて尺玉の咲く  
爆ぜる爆ぜる光の中でまだ肩に届かぬ背丈の影描かれる  
ああきみはいつ気づくかな刈草の匂いが海馬にしみていること  
沈黙に秋は訪う残響と金の柳の溶けた夜空に  
僕たちのためと思えるスターマインだから拍手をもつて送ろう

ああきみはいつ気づくかな刈草の匂いが海馬にしみていること  
沈黙に秋は訪う残響と金の柳の溶けた夜空に  
僕たちのためと思えるスターマインだから拍手をもつて送ろう

## 知らん話すんな

サラダビートル

世界一

雀來豆

ペルソナでキノツラユキを呼び出して火炎攻撃する意外性  
人修羅が地母の晩餐撃つときの真似がきつてもう歳かなあ  
もし僕がペルソナ使いだつたらヒルコでメギドラオンを撃ちたい  
おれはメガテンエアップでうたを書く外道『オタク』今後ともよろしく  
はい特技はハマオンです競合他社を確率で即死させます  
海外の宗教者に超怒られてでも作つてくれてありがとう  
「切なさ乱れうち」は皆やつてるが『刹那五月雨撃ち』はできない  
ベルベットルームに行つたことがある小宮さんは休憩中だった

## 失望はじめました

たえなかすず

心頭滅却

田中翠香

駅ナカの蕎麦屋でひみつの待ち合わせやや緊張ぎみに微笑んでいる  
たわむれに腕を伸ばしてたわむれに待つていたのだろうか あなたは  
空けていない缶の雲をぬぐう指 圧倒的に目は合つたまま  
これもまた傷みはじめた恋かしら桃を剥くのはいつもひとりで  
黄昏はまなざしに射しそののちにきみの隣に落ちてゆくかも  
熱帯は遠いでしようか 純愛をしておりますが行けるでしようか  
キャンドルに照らされるひと照らすひと 泣き顔からまず演じてほしい  
しばらくは歩いて笑つて歌つたらそれぞれさましい家へ帰ろう

## 秋のソナタ

多香子

もう

千原こはぎ

夏終り湯上りの肌にほんのりとミルク色した乳液をつける  
身体つて伸びるしなかなか縮まない、季節が変ると服が縮むし  
秋の日のくしゃみは誰かの噂かと思えど猫もすすきにむせる  
のそのそと支度手間取るわたくしに「はがゆいのよ」と高橋真梨子が  
赤トンボ一つ一つが柵の上この家の人はもう居りません  
台風の直撃受けるふる里はライブカメラの画面に真っ白  
秋風に乱れる髪を気にしておしゃれインコの毛づくろいのよう  
手の内にハトや子猫が出るような素敵なミラクル起これ月曜

降つてくる空は砂地に侵み込んで決別の日を醸成させる  
前髪はいつも言うこと聞かなくてわたしは愛を測りきれない  
向こうには寝息をたてるひとがいる嘆きかなしみ戸惑い嘆き  
ふわふわり漂ようわたし類型に嵌めたい他人に毒を盛ります

この部屋は強制されたいえだから壊しておくねいってらっしゃい  
この空の広さ深さを知るひとよかなしみの測背負うひとつこそ  
水底に波紋のしるし水泡のきらめくひかり手脚ひろげて

世界一美しい文字図鑑その文字はほんとうにいるのではないのです  
鹿が来てまた鹿が来て占拠する東大寺二月堂の登廊  
待とう蚊にくわれた痕がわたくしという現象が消えてゆくのを  
越して来て初めて知つたこの街にプラネタリウムも海も無いこと  
ライカMモノクロームが写しだす虹はあたかも空の葬列  
東大寺唐招提寺薬師寺とさすらいながら老いてゆく鹿  
八月の風吹きぬけて鷺池に幻のごと百日紅ふる  
夜明けまえ空のまほらをゆく鳥に眠らぬわけを問い合わせてみる

もうくれる気持ちが薄くなつたことわただしだけ気がついてしまつて  
声を聞くだけで喜んでくれた日もあつた おんなんじ大きさだつた  
会うことも話すことも努力になつていらないなら手放していいのに  
きみじやないひととご飯を食べに行く自傷みたいな想像をする  
大丈夫、依存しないし大人だしもともとわたしのじやなかつたし  
数年をありがとう妙に身は軽く軽薄にこぼれる百日紅  
もうなんて言わてもいいこれ以上傷つくことのない毎日に

母もまた喪つてゐる朝夕を静かに祈るかなしみの背せな

手伝ふことを探した龍神の祠の水をとりかえにゆく

生きるのは必死のことと祖母も母もつながる道のうえにそれぞれ

小糠雨そぼぶる村にコンビニはなくてお菓子は商店で買う

遠足を不安げに待つ子らのいて祖母に甘えていたのだ私

学校をまた三日休むあの子らの遠足は晴れていなければならぬ

まだこわい 形見となつた大幣を手にあめつちとつながる覚悟

祭壇に向かつて二札 雨音が私を試しにきて本降りだ

### としてのビール

中村成志

ガリバーが抜けたのでしょか隧道の奥の奥處に陽光の針  
八月のスノードームに込められた水ひと握り熱を湛えて

とおりやんせ紅い鳥居の連なりに染まり始める足袋先の爪

朝焼けは覗き見るもの夕焼けは否応なしに肩へ降る物

桜葉が散り始めてもおつとめがまだ終わらんのかいなど蟬が

麻痺剤としてのビール興奮剤としてのビールひとりのビール

夜明け方の風いつの間に肌を包みふかい眠りにはならないだろう

燐火へと手を近づけるそもそものほとりへ帰りたがるのが人

### 怪奇星キューのすべてのちよつと

西淳子

宇宙船の墜落だつて知つてたら願いを三回唱えなかつた

Spotifyで配信されているかもと「やさしい地球」で検索する

真つ黒な人形。そして、まづくろなひがた。涙が出そうになつた

衣食住だけじゃたりないぼくたちにあとひとつだけアレをください

雷光ののちに雷鳴。腹話術みたいだねつて、きみは笑つて

ちよつと、ちよつと、ちよつとがあつまつて星になつたの、あそびにおいで

詩が彗星みたいに届き、こわいって生きることだと教えてくれる

すごろくで最初にあがる それからは彼らの守護霊みたいな時間

### 青い天井

薄荷。

Elsagate

疼木快維

水底はうす青色にゆらめいて屋内プールのゆたかな光

スタートは小指の先までまっすぐに水面を切りさくナイフとなつて

肉体の重さ忘れる背泳のスタートを切るその瞬間に

見上げれば視界は優しくきらめいて水の向こうの青い天井

指先を水にすべらせ始まりのワンストロークの確かな手ごたえ

まつすぐに白い飛沫を蹴りあげて泳ぐつま先、トビウオダンス

五メートルフラッグの黄は鮮やかで進むぼくらを待ち構えている

歎声は魚になつて青空の端から端までぐんぐん泳ぐ

### おかしな二人

はゆさく

夕焼け

ひなお

週末をどこで過ごすか決めたけどあのスイーツもレビュー気になる  
マンデリンフレンチモカの爽やかなあなたに似てる香り見つけた

上空に青の洞窟が浮かんでクラッシュしていく二人のボート

手を振った雲はあのころのわたしを甘く溶かしてわたあめつくる

いろいろと想うココロを二人分の型に入れて焼くモニュメント

お砂糖が敷き詰められた時間には黙つても重なる視界  
食べるから甘いの買う?とカゴ入れた 一人で食べるフラン・パティシエ

世界中あなたとわたし二人きり おかしな二人END、胸熱

防護服、東の壁へ向けと指示、咳込むもグリグリは止まない

今日ほどにパーソナルスペース守られたことはなかつた発熱外来

検査結果を持つ人だけが近くで写真撮ればと言われて撮つた

屋内へ入れてもらはず炎天下日傘のなかで隔離と思う

天の声「届けますよ」と帰されて後払いでいいもてなしの国

菌というアイデンティティーも感じた日まだ人として生かされている

負けて知る平和もあつてことはもごはんも少し柔らかい国

公園の女神像は甕から水を注ぎ 噴水からは虹が生まれる  
遊歩道にサンダルが一組落ちている 周りを見るが誰もいない  
近づくと船虫が素早く岩の間に逃げる覗くと何十何百もいる  
ヒトデが浜辺に散らばつている子供たちは拾つては投げる  
貝殻を拾つて笑う君の笑顔 ああそのような時もありし  
江ノ電の車窓 夕焼けが海を染め漁船が港に帰つてくるのが見える  
電車を降りて海に近づくと磯の香りと風の冷たさが肌に染みる  
夕焼けに染まる空と海 来世とはこんな所かとひとり微笑む

青軽き南の島の漣に飛び込まほし高齢の肌

電停の横の木陰に放課後のスイーツ店を決める声あり

営業の汗の滲みし襟口をやうやく冷やす空調の口

エアコンの奥のパーツをひとつ持ち取り寄せ七日は遙かに遠し

ウインドーのラッシュガードとビキニとが猛暑の肌を吸ひ寄せてゐる

陽は高く重き装具の兵士らは汗と泥との銃弾を撃つ

駅前でスタバのカフエラテふたつ持ちトイレの先輩待つ仕事なり

藪の中秘密基地へと前進し猛暑日にひとつコーラ運びぬ

## 小学校五年生の学び舎

笛地 静恵

思い出の国にのみある学び舎の夢の道から正門くぐり

金賞の紙をはられたぼくの絵よ廊下の風にふるえているか

骨格の標本の棲む理科室はときどき妙にしんとしている

雨音は全教室をとりかこみ眠りの粉をうすきまぶたへ

宿題を忘れたひとりたちんぼうバケツの水もたそがれている

ランドセル背負つたままの放課後ぞカラスの森へ虫捕りに飛ぶ

真つ黒な夕焼けへ立ちさようなら ふりかえらずに六年生へ

のりはがす教科書の紙ペりペりと紙の匂いの新しきかな

## 夏の門！

御糸さち

桜前線

未知

ひまわりの烟のまわり駆けまわり色鉛筆がまた減つてゆく

長靴をそろえて置けば現れる座敷わらしの白すぎる肌

ドングリをぶつけでブタを捕まえてハムという名をつけて育てる

そういうえばこの町には床屋がないな メガネ屋はあつていま目が合つた

お風呂なら二日に一度 その代わり毎日となり町の川面へ

えんとも時計の塔も灯台も記念碑でしかない、この夏の

ゆやゆよん テントの中はまぼろしに満ちまやかしのまぼろばの夜

たからものみたに光る空きビンのように光っている日々だった

## キッチン

深影コトハ

茉莉花と珊瑚礁

水也

真つ白いエプロンで立つキッチンでこれも自傷と呼ぶのでしょうか  
鍋の火をぼうつと見つめているときの不意にひらめく前世占い

熟れすぎたキウイの多分プライベートゾーンのあたりを潰してしまった

包丁と腕が一つの生き物になつて離れぬ白昼夢だった

ブレンダーって便利ですのねドロドロにしてしまえるのねどんなものでも

月面もエプロンも日々正面をあなたに向けて美しい顔

カタカナが多い料理のかたかナでなかつた箇所をスプレーで潰す  
妻という額縁のなかにスペースを綺麗に並べて満月の夜

したたかに生きながらえてほしかつたひょうひょうとした背中のままで  
永遠の少年としてちはやぶる村上春樹を小脇に抱え  
口端を上げてへらへら笑つては気まぐれな言葉さえ好きだつた  
冷えた腕で抱きしめられて始まつたのに薄暗いくちづけばかり  
消しかすを払うみたいに拒まれて世界が割れてしまつた日のこと  
どしゃ降りの雨に降られたわたしには謝らなかつたきみの純情  
「星とかにされたなくて」「何になりたいの?」「何になりたくはない」  
いつかぜんぶきみのせいにする終わらない恋も何も見えない夜も

## アラウンドファイフティー999

まさけ

右足の膝が痛くて仰ぐ空 火星の親父よ君は正しい

メーテルが初恋だつたと言う人の女がショートヘアの理由は

ラーメンは尊きものでチャーシューを食みつ浮かべる厚いビフテキ

万感の思いを込めて行く汽車の息子の顔に見てるあの頃

自分以外全部バカ学博士だらう怒声ばかりのうちの社長は

荒れ狂う客と天候持つ傘を戦士の銃のように構えて

果てにあるアンドロメダの輝きに酷似しているスナック銀河

社のネジになつております魂は売るか俺らはアラウンドファイフティー

どしゃ降りの予報は外れ人生の桜前線がせまっています  
信じれるものは信じるおうし座の恋愛運は花丸でしよう  
冷静に分析して運命の人と出逢つてしまふ確率  
笑つたら八重歯が見えて本日は一目惚れにてお休みします  
氣をぬけば聞いてしまう心から君が飛び出さないようにつて  
気がつけば共通点を探しててラッキーカラーはオレンジらしい  
つまらない会議も君の口癖を探す研究時間に変わる  
笑つたら桜みたいとほころんだ見つめるわたしの肩にもさくら

ジャスマシンと呼べばよいのと同じにはなれないものよまりかまつりか  
華やいでいるわと塗つた爪の先わたしの色ではないのだけれど  
屍をつみあげている最中に踊るのひとりかがやいている

あとかたもなく消えていくはずだつた月のひかりに芳香がゆれ

白花をかさねてまるくととのえる記憶の隅に打ち捨てていく

だれだつて振り返るものうるわしく光るしづくのないものみたい

終わりなき身を欲すれば焦熱よ在れもせすには花を望みて  
ちぎりとるように生きてた上澄みのうつくしさしかわたし知らない

プリキュアになつてわかつたことがある。プリキュアだから言えないけども、プリキュアは違憲だという人たちを論破するため貼られる画像。新しい制度がいかに安全か元プリキュアが説明します！

国連で平和を説いたプリキュアはみな虹色の服を着ていた。プリキュアよ好きな韓流アイドルを訊かれ素直に答えるなかれ。

平和維持活動中のプリキュアが見下ろしているふるさとの海。

あれほどの活躍だったプリキュアを祀らないのは失礼だろう。プリキュアになりたいっていうお友達、今の気持ちを忘れないでね。

## 倉式珈琲店

三好くに子

やうやくに見つけし本をレジに置く。レシートは奥付けに挟み込む。啓文堂書店の隅に昏むカフエ。わが指定席を待つ三十分。世阿弥いふ「花」の正体つきとめむ『風姿花伝』のポップな頁。お待たせをいたしましたと店長の蝶ネクタイと銀色の盆。サイフォンの珈琲の香をくぐりくる老いは購ひきた本を手に持ち。真四角の氷からから泳がせてほんのり酸味のあるカフエ・オ・レ。眼つむれば、声、咳、足音、ジャズピアノ、珈琲の香り、新刊の匂ひ。いにしへは風に名前がついてゐたウエイトレスが運ぶ風にも。

## 玉葱のやうなオレンヂのやうな

村田一広

さながらアクアリウムねコンビニに光るミネラルウォーターのむれ。雨垂れがぽつりぽつりと穿ちゆく石が雨蛙に姿変ふ。赤身にサラダ油を混ぜればトロの味になるでせう？ 海苔巻きを切るタカアシガニが歩く音して突風に縛れる高窓のブラインド。直前まで清見オレンヂかと思ひ手に執れば皮のついた玉葱。ベビースターラーメンの細めん嘴で器用につまみ食てる鴉。猫だけが僕を見抜いて空っぽを潰さぬやうに膝に座つた。ぬひぐるみの瞳のことば翻訳す（あなたに買はれたい。レヂへGO）。

## 晩夏の一曰

森内詩紋

どこまでも行ける気分で歩きだすゼブラゾーンは白だけを踏む。新しいビルが建つか此所だけは活気にみちて駅のクレーン。大判のガラス戸据えたウマ台を運ぶトラック街道を行く。「こんには、買い物ですか？」「ええ、今日はモンキーレンチ入手したくて」「センセー！」って駆け寄ってきた五年生。ギブ！ギブ！それじゃベアハッジだ……ぐつ！帰り道気になつて店に寄る「マスターード抜きでホットドッグを」十字路に見慣れぬマシン新型のネズミ捕りだと笑う警官。くたびれて家に着いたが玄関にセミ・ファイナルとう晩夏の戻が（汗）

## 夏の終わり

六浦筆の助

団結を支えたキャンプの残り火をいたわるよう包む朝焼け。夏期講習残務仕上げるかたわらで玉置浩二が歌う「ハーモニー」。思い切りスパークしたの？江ノ島の花火の破片砂に埋もれて親友の墓参の帰路に黙りこむ我等にしんみり過ぐ風の盆。バイクだけかする真昼の商店街「楽しいお買い物♪」だけ宙に累々と残暑の倉庫の屍となりゆく暑中葉書のかもめ。マラソンのゴールの「サライ」が消えてから夏の風船しぶんで消えて横浜でキミが食べてるものパフェはゆっくり夏の終わりを見てた。

## 月がいる月がいない

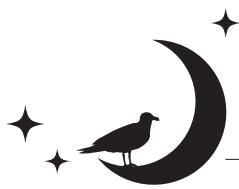
杜野詩季

おやつ前二人で見とれる朝顔の花は薄桃透けないくらいの水栓を開ければホースと息合わせ夏のダンスを子はやめられない。まだ海を知らない子らにいつの日か言わねばならぬ震災のこと。うつすらと覚え始めた形だろう「はこ」と指差すビルのそれぞれ夏の陽はしづくとなつて真昼間にアリを追う子の額に落ちる。月がいる月がいないとわかるんだ。つき、きょう、あそこ。白いかけら指すお祭りが子に優しくてかき氷、ヨーヨー、金魚と手は忙しい。

## — ush —

朧

感情を切り分けるのは苦手なのフリー・ズドライストロベリーも練乳のチューブ直接吸ふやうなあなたをいつも見てみたいから。真面目とか誠実とか言ひ訳の河童の皿のカラメルの味。嫌ひにも好きにもなれずマシュマロをいくつも焦がす血が燃えてゐる。チヨコレートまみれにしたいビターでも左の頬にくちづけをして理想つてチュイングガムのなかにあるさはれないからよごれないままマカロンを守らうとする目に映るロツキンホースバレリーナ・蛇。パイ生地にレモンカードを塗つてゆく最初に会つた唾液のゆくへ



## テーマ詠 「月」

満月に羽があつても翔ぶことができない蝶を拾い集める

鈍くなり月の魔力を怖がらず眺められそう  
強くなりたい

彼のことなんて話すな青白い天の穴まできみを攫おう

美しい月といふ名の舟は乗りあなたはあなたらしく進める

七月の三元祭り、皆の食事や人とのふれあいが大きく構成

卷之三

卷之三

月面二三(風の次)、夢をめぐらす

まつすぐなものはないこもない用で童子こ穴を開けたが

何回も何回も分け合つてきた会うたび一つしかない月を

月並みな言葉で君をなぐさめて買って帰ったハーゲンダッツ

卷之三

はんとかこアノにかなのは悪いこと、」元ハシム月はん

卷之三

مکالمہ ایک دوسرے کے ساتھ میں ایک دوسرے کے ساتھ میں

八月の平田園二は九冊目の豆次スアツキヅツフ雅好

農の青が目蓋の裏で爆ぜて、ひる八月だけの魔法だつたよ

知らぬ間に近づいているプログレスの月はもうすぐ満月になる

新月のまばゆい暗さ  
してみたい悪いことならたしかにあつた

月旅行はきつちり傘を差してゆく 地球に先っぽ差し向けながら

あの月はぺたんこの月それでいいきみは名前を知りたがるけど

古事記にもツクヨミはあまり出ないのにメガテンに出るわけにいかない

◆ あおいそうか  
◆ 麻倉ゆえ  
◆ 雨虎俊寛  
◆ アライアヤ  
◆ 有村桔梗  
◆ 井倉りつ  
◆ 石川順一  
◆ 十六夜／朔  
◆ 池田竜男  
◆ 魚野さざみ  
◆ 宇祖田都子  
◆ 泳二  
◆ h<sub>s</sub>  
◆ 佐藤永魚  
◆ 九月ゆうき  
◆ 虚光  
◆ 君村類  
◆ 砧  
◆ 河岸景都  
◆ 潤沢井戸  
◆ 歌島孟  
◆ 緒方 燕柳  
◆ 大坪命樹  
◆ 遠藤ミサキ  
◆ おおむうけんた



うしろからやさしいひかりが満ちてきて黄色いボタンの月が見ていた  
たき火つて十年ぶりだ弟のコグマ月の輪から燃えてゆく  
殺すなら月が綺麗な夜にして 最期くらいは輝きたいの

三日月のどちらを握ればよいのだろう白い刃先はしつとり濡れて  
カロリーは気にせず食べる月餅に桃の花びら丸く描かれて

「じゃあね」つて言い合ったあと動けない今夜の月が強すぎるせい  
満月の夜に買いたい 同様に確からしい白桃をひとつ

月はかたちだけでなくていろいろでかわっているでも空にあるの  
白鯨が八月を翔ぶ昨日までの運動靴はちひさくなりぬ

新宿から大月までを各駅で言える人ほら湖面に道が  
ご相伴にあずかりたくて掲げ持つ白いお猪口に迎えたる月

8月はメビウスの輪で神様がハサミを入れて9月に変える  
空じゅうが淡い香りに包まれる苹果ソルベのような月の出

◆ 汐射ハルカ  
◆ 雀來豆  
◆ 白石 夜花  
◆ 千原こはぎ  
◆ 月岡 浅葱  
◆ 田中翠香  
◆ 天国ななお  
◆ ともえ夕夏  
◆ 中村成志  
◆ 夏生 薫  
◆ 西淳子  
◆ 薄荷。  
◆

灯火や時間遅れの吹き流し花の匂いまで月に向かう  
月面にアロンアルファを塗りたくる計画だけを頼りに暮らす  
散歩に出れば西空には月 犬に話しかけると寄り添つてくる  
今日の月笑っていたと絵日記にクレヨンで描く星形のまる  
この町の金持ちだよなあちこちに駐車場もつ月極さんは  
燐然ときみは輝く 月のないわたしの夜空を焦がすシリウス  
恋ひしさを切りとつたやうな三日月も各駅ごとに一緒にとまる  
三日月の針であなたを釣り上げて星夜の魚籠に込め眺めたい  
月だけが知ってる私の朝帰り 好きなの?彼が 好きだよ彼が  
秘め事は秘めているから美しく月の極地に投げている石  
ぬばたまの夜に欠けたる望月も居待ち臥し待ち君まちかねや  
いつまでも回収されない伏線のように月には裏側がある  
信仰を持たぬ身体で月光を浴びれば骨の軋みゆく音

◆ 深影コトハ  
◆ 御糸さち  
◆ Maria  
◆ まさけ  
◆ 真岡まな  
◆ 箕地静恵  
◆ 福山桃歌  
◆ ふじはる  
◆ 細川エリカ  
◆ 廣珍堂

# 「月」

テーマ詠

あのひとが海原ならば月になる満ちることなく欠けることなく

月のない夜でも月は空にある硝子の窓をまるく切つて

生きている人はいますかラジオより月の光が漏れ出づる夜

十五夜を風雨に巻かれ下向けば汁粉の上に白玉の月

まだ月へも行つてないのにはやばやと火星へのツアーを申し込む

早涼を照らす満月ぼんやりと漂う宇宙のクラゲのふりで

月だつたこともわすれて硝子器にヴィシソワーズのしづかな湖面

蜜月のグアムの海のきらめきが海鼠なまこの群れに負けていたこと

三日月を「爪みたい」って言う君が夜空に見てる指はなに指?

隣立つ君に素直に言えなくて「月が綺麗ね」とそつと呟く

太陽に手を伸ばすたび思ひ出すからだに月を飼つてゐること

◆ 未知

◆ 水也

◆ 深山睦美

◆ 六浦筆の助

◆ 村田一広

◆ 森内詩紋

◆ 杜崎アオ

◆ 杜野詩季

◆ 茂呂直人

◆ 朧



まだ月へも行つてないのにはやばやと火星へのツアーを申し込む  
村田一広

【tanka】

テーマ詠から拝借した  
短歌をもとに描いた  
イラストのなかに  
10個のまちがいがあります  
見つけられるかな?

短歌で

## まちがいさがし



# 一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から  
気になった一首をとりあげて  
200文字くらいで語る  
一首評のコーナーです

雨の日のその静けさの鳥たちよ羽根に水  
玉いくつも載せて

大橋春人

できるだけ人肌のまま触れたくて声に加  
えて首もうなづく

君村類

『世界のすべての鳥たちへ』、連作を通して、鳥、雨、  
静けさ、そして祈りが巧みに詠みこまれていて心を  
揺さぶる。感傷的な歌は嫌いだという口癖が出せな  
いでいる。それがこの歌の力かな。ともあれ私は鳥  
の歌が好きなのである。だから引用歌の上句は刺さ  
る。この十七音だけで完成された詩だと唸らされて  
一息つく。「息づいてビールを飲む。いい短歌は  
最高の酒肴だ。O birds / Of a rainy day / Of that  
sillness 酔つたので英訳までしちまつたよ。



人ひとり殺めてしまふ勢いでハーゲン  
ダッソにフォークを立てる

新井きわ

食の通過儀礼のよう。主体がカチカチに凍った厄介  
な生物と格闘し、喜びで入り混じる景が浮かびます。  
31音に、「アイス」3音でなく「ハーゲンダッツ」6  
音としたところにも、「ハーゲンダッツ」を食すは特  
別な時間とリストべクトされているのかなど。なかなか溶けない、なかなか味わえない、生きとし生ける  
ものにフォークを立てる挑みがたまらなく可愛いです。ちなみにハーゲンダッツ専用スプーンだと少し  
は早く溶けるみたいです。

一首評

はゆさく

美術室は完璧だったあまり1、みたいな椅子と先生がいて

北谷雪

連作「森のひとびと」からの一曲。美大生とその周  
辺から美術室という場所にフォーカスされた歌で、  
そこはいなくてもいい?先生がぼつねんといて初めて完成となる空間のようです。椅子と先生を「あま  
り1」とする発想の新鮮さ。また「完璧」と「あま  
り1」という言葉の対比も効いています。美術に関  
わっていると思われる作者だからこそその視点だと思います。懐かしい絵を見たような一首でした。

一首評

杜野詩季

さつき挨拶した先生とすれ違うときの会  
釈のように降る雨

ツマモヨコ

とても好きな短歌だ。構造としては岡井隆のいう「序  
詞的比喩」になっている。前半の細かい描写が「よ  
うに」によつて直喩であつたことを明かされるとこ  
ろに、構造的カタルシスがある。この絶妙な比喩か  
らは誰もが、少し伏し目がちに、しとしととやわら  
かく降る雨を思い浮かべるだろう。収められている  
連作のタイトルが「日輪」であることを踏まえると、  
太陽の照る晴天から恥ずかしそうに降つている天  
氣雨のことだと読み取れる。

一首評

疼木快維

たぶん電話発明の時から、人は声だけでなく身振り  
手振り付で受話器に向かっていた。それは礼儀作法  
や情報をより届かせるための技術ではなく、それこそ  
人が言葉を交わし始めた頃からの習慣が、本能と  
なっているのだ。主人公も、相手を感じたいからこそ  
自然に体が動いている。後からそれに気づく。それが「触れたくて」の表現となる。

ひらがなや「人」「肌」「触」の円やかな流れの中で、  
「声」「加」「首」の力音の尖りが美しい。

一首評

中村成志

夢色のでっかい馬糞撒き散らし竹下通り  
を往くユニコーン

深山睦美

でっかい馬糞で笑つちゃいました!私のなかで幻  
獣つてうんちしないイメージがあつたんですね。ユニ  
コーンつて馬だもんな。ユニコーンのうんちはた  
しかに馬糞だよな。あと、でかそうなのも分かる。  
何かハツとさせられました。「夢色」「竹下通り」「ユ  
ニコーン」といわゆる「カワイイ」とか「ゆめかわ  
いい」が出てきて、きやりーぱみゅばみゅっぽい世  
界観の一首だなと思いました。可愛いのなかにグロ  
キモが混ざっちゃった感じ。

一首評

西淳子

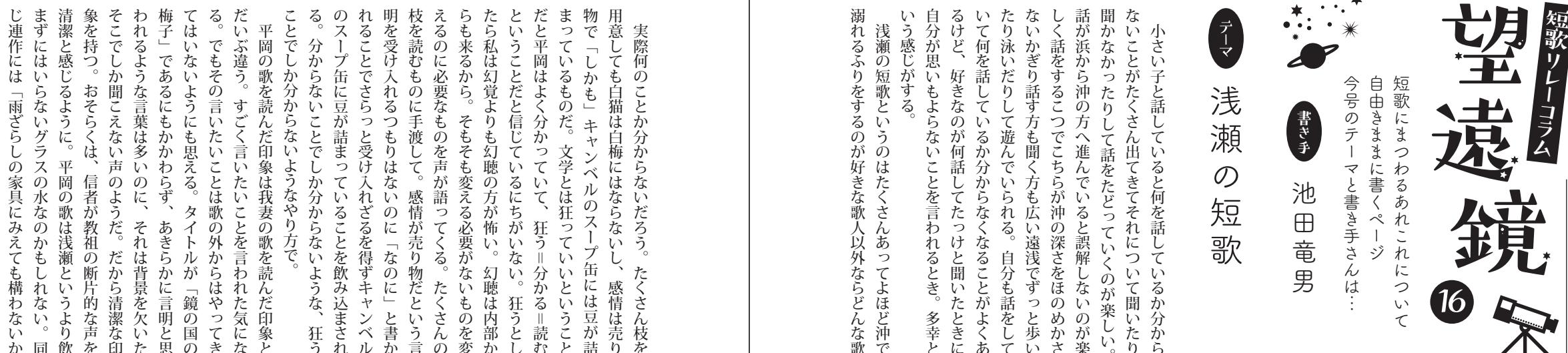
前号のまちがいさがし 答えあわせ

ほっこりといき 短歌で  
**まちがいさがし 答えあわせ**

10個のまちがいは  
見つけられましたか?

前号のまちがいさがしの答えはこちら!

Illustration: 千原こはぎ @kohagi\_tw



短歌にまつわるあれこれについて  
自由さままに書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

集にも必ず浅瀬の歌はあるけど歌人全体の印象や歌集全部が浅瀬であるようなもののはあまり多くないと思ふ。まずは我妻俊樹の『カメラは光ることをやめて触った』からまあまあ好きな歌を。浅瀬というより子供用ブームのような歌集。

道々にざくろ咲くならふところにかかるくばドワイザーの空き瓶

我妻俊樹

## テーマ　浅瀬の短歌　池田竜男

小さい子と話していると何を話しているか分からないことがたくさん出てきてそれについて聞いて聞かなかつたりして話をたどつていくのが楽しい。話が浜から沖の方へ進んでいると誤解しないのが楽しく話をするつでこちらが沖の深さをほのめかさないかぎり話す方も聞く方も広い遠浅ですっと歩いたり泳いだりして遊んでいられる。自分も話をしていく何を話しているか分からなくなることがよくあるけど、好きなのが何話してたつて聞いたときに自分が思いもよらないことを言われるとき。多幸という感じがする。

浅瀬の短歌というのはたくさんあってよほど沖で溺れるふりをするのが好きな歌人以外ならどんな歌

実際何のことか分からぬだろう。たくさん枝を用意しても白猫は白梅にはならないし、感情は売り物で「しかも」キヤンベルのスープ缶には豆が詰まっているものだ。文学とは狂つていいということだと平岡はよく分かっていて、狂う／分かる／読む

ということだと信じているにちがいない。狂うとした私は幻覚よりも幻聴の方が怖い。幻聴は内部からも来るから。そもそも変える必要がないものを変えるのに必要なものを語ってく。たくさんの枝を読むものに手渡して。感情が売り物だという言明を受け入れるつもりはないのに「なのに」と書かれることでさらっと受け入れざるを得ずキヤンベルのスープ缶に豆が詰まっていることを飲み込まれる。分からぬことでしか分からぬようやうだ。でもその言いたいことは歌の外からはやつていてはいよいも思える。タイトルが「鏡の国の梅子」であるにもかかわらず、あきらかに言明と思われるような言葉は多いのに、それは背景を欠いた

て。未知のものが何かを握らせてくる感じがない。私がこの連作で一番好きな歌はこの歌。

肉眼でみると姉は小さくて姉の代わりにここにきました

平岡直子

肉眼でみると姉は小さくて姉の代わりに小さく肉眼でみると姉の代わりにここにきましたという丁寧な物言いによって納得させられる。下の句まで読むと上の句の声のボリュームが上がるのも平岡の歌の特徴かもしれない。

別に変わったあり方で浅瀬にいる歌集もある。永井亘の『空間における殺人の再現』だ。この歌集はかなり分かりにくい。

動物は煙になつてしまふけど夕日は本物を持つてきて

永井亘

口元は途切れた夕焼けを真似て正しい発音で罵つた

夕日や夕焼けは歌集中たぶん最も多く使われている言葉で、永井にとって特別な意味をもつていている(次に多いのが「啄木鳥」という言葉。「啄木鳥をこらえたら」というすごい結句の歌もある)。食べるためか弔うためか焼かれて煙になつてしまふ動物は贋物でそうした体を持たない夕日の本物を持つてきてという。途切れた夕焼けを口が真似るならその口か

白猫を白梅の樹に変えるにはすぐたくさん枝が要るのよ

平岡直子

感情が売り物なのにキヤンベルのスープ缶には豆が詰まつて

同

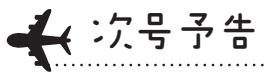
平岡直子の歌には声がある。私がもつとも好きな連作の一つに平岡の「鏡の国の梅子」(『外出』二号)がある。津田梅子を思わせるタイトルで実際にお札の歌も出てくる。タイトルがすでに声を出そうとしているといつていい。津田梅子について語ることは多さうだ。でも平岡の短歌は潔癖なまでに外部からの侵入を嫌がっている印象がある。でも多くの歌が声を上げる。かなりの大声で。平岡の歌にある中毒性は声の大きさと清潔さにあるんじゃないかなと思う。

と言葉のつながり以外の見えない文脈はないということを一首一首が読む人にはつきり伝えてくる。この歌には外部はないと。また口語口調を使つていても妻の歌からは声があまり聞こえない。声も外部もないのに妻の歌がおもしろく読めるというはどういうことか私もちゃんと分かっていないけどたぶん短歌定型のなせるわざだろう。短歌定型は地球全部が入る箱舟のようなものだ。とはいえ妻の歌にも声を感じるような歌はあって次のような歌を読むと平岡直子の歌と思えなくもない。

Twitter  
ハッシュタグ

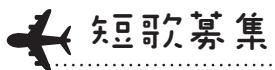
## #うたそら

「うたそら」では Twitter でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。



連作欄 8首の連作自由詠  
テーマ詠欄 「茶」  
一首評「そらよみ」  
短歌リレーコラム「望遠鏡」  
リレーエッセイ「いちごいちえ」

第17号



第17号 〆切 23 10/31(火) 24時  
・8首の連作自由詠 ・テーマ詠「茶」1首

第18号 〆切 23 12/31(日) 24時  
・8首の連作自由詠 ・テーマ詠「新」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください  
<http://kohagiuta.com/utasora/>



朝晩はずいぶんと涼しくなってきましたが、日中はまだまだ暑い日が続きますね。夏休みも終わり9月が始まりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。  
わたしはこの夏は暑すぎたせいもあってあまり外出をしなかったので、秋こそはもう少し出かけができるたらなあと思っています。短歌イベントや歌会などに参加できるといいのですが……。皆さまにとってもすてきな秋となりますように。

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら 第16号

参加歌人様	73名
連作欄	50名
テーマ詠欄	63名
一首評	6名

ご寄稿いただきありがとうございました!

コラム 池田竜男さん  
エッセイ 永井駿さん



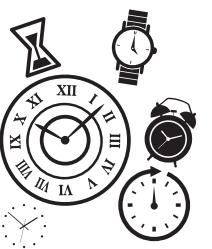
illustration: kohagi chihara

エンドロールは逆流する川のよう、目を凝らして見ないとあつという間に過ぎ去る。目を凝らしていくも、すべての名前を読み切ることは難しい。それなのに、昔の恋人と同姓同名の美術担当を見つけたり、知人の名前（このときは本当にびっくりして巻き戻して再確認をした）を見つけたりすることができて、人間の脳はおもしろい。また、エンドロールを見れば見るほど、一つの映画に関わっている人の多さに私は毎度圧倒されるのである。

ある静かで素晴らしい映画を見終わっていつものようにエンドロールを眺めながら、ふと、ち尽くし、倒れるのを待つだけだろう。本当に

こうして考えると、時間は個人から切り離すことの出来ない代物であり、私はそれで良かつたと思う。一人一人の時間を足し算することはできず、五〇〇人が撮影現場に一堂に会しても、時間撮影したとしても、流れた時間そのものは一時間にしかならない（工数としては五〇〇時間掛かってはいるが）。もし、それぞれの持つ一時間を切り出して足し算することができて、その場に五〇〇時間の空間が生まれるとしたら。私たちは何万倍もの時間を持つことになつて、きっと最後は中身が空洞になつた木のよう立まらなくつて少し不機嫌になつてベッドで眠ることができる。あなたが、このエッセイが全然つまらなくつて少し不機嫌になつてベッドで眠るとしても、次はあなたの書いたエッセイを読むから大目に見てほしいし、もし書いたら、私に教えてほしい。

永井駿



16 リレーエッセイ いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ  
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ 時間  
書き手 永井駿

この一本の映画にかかった延べ時間数は一体どのくらいなのだろう、と考えことがある。例えれば総制作時間。例えば構想年数。具体的な時間を表す言葉はあるが、おそらくそれは撮影に要した時間や、脚本家の頭の中のアイデアを起点にした時間であり、私の考える時間とは少しユアンスが違う。仮に関与者が五〇〇人いて、一人一人のその映画に関わった時間を延べて計算すると、とんでもない時間になりそうで、くらくらする。

良かつた。

人はさまざまなものを切り出して共有できる形にして、生活を発展させてきた生き物だと思う。火や、電気や、情報。人工知能の誕生によって、脳の中身の切り出ししまで始まっている。ただ、時間を持ち寄つて同じ時間を共にするこ

とに、かけがえのなさがある。

タイムパフォーマンスという言葉さえ、出始めてすぐに陳腐化してしまうエンドロールのような時代。切り出せない時間は平行線のか細い川のようで、それが顔の数だけ無限に並んでいる。しかし、ある一瞬一瞬だけ、川は交わることができる。あなたが、このエッセイが全然つまらなくつて少し不機嫌になつてベッドで眠る

としても、次はあなたの書いたエッセイを読むから大目に見てほしいし、もし書いたら、私に教えてほしい。

The background of the image is a clear blue sky with several white, fluffy clouds. In the upper left corner, there are three white silhouettes of birds in flight. A bright, circular sun is positioned in the upper center, casting a soft glow.

## うたそら 第16号

発行：2023.09.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi\_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>